

特集②:ミュンヘン・ハイエンドショー

High End 2014 in Munich

＝ミュンヘン・ハイエンドショー・レポート＝

森 芳久 編集委員

今年も恒例のドイツのハイエンドショーが5月15日から18日まで開催された。ミュンヘンのM.O.C（ミュンヘン・オペレーション・センター）に会場を移して早くも11年が経過し、今ではミュンヘン・ハイエンドショーとして毎年世界に新しいオーディオの風を発信し続け、今年で通算33回を迎えた。

筆者は、フランクフルトで開催された初期のハイエンドショーから今日までほとんど毎回このショーを出展社のメンバーとして参加してきた。オーディオメーカーを退職してからも毎年、趣味としてこのショーに顔を出している。わざわざ日本から遊びに出かけるほど、このショーには見るものが多く、また世界のオーディオ動向を知る上でも貴重な情報が得られるからである。それ以上に、ここは世界中からハイエンド・オーディオメーカーの伝説的なオーナーや設計者、また名だたるオーディオ雑誌の編集者や評論家たちが集まり、彼らとの交流ができることも大きな楽しみの一つとなっている。

そして何より、ドイツ・ハイエンド協会が来場者に対して素晴らしいエンターテインメントを提供してくれていることも大きな魅力であり、今日世界中でハイエンド・オーディオが衰退している中で毎年飛躍的な成功を遂げている秘密であろう。飛行場や幾つかの特定ホテルからの無料送迎バス、事前告知の徹底やホテルの斡旋までこのドイツ・ハイエンド協会の緻密で素晴らしい企画力がこの成功を支えているのだろう。それが、今年も出展者数が40カ国から452と昨年の25%増、入場者数は17,855名と前年比10%増となった数字に現れている。もちろん、会場の展示面積も昨年までの20,000平米に比べ、26,500平米と大きくなっている（表1参照）。

（表1）2012年から2014年まで、直近のショーの推移

	2012年	2013年	2014年	前年比%
会場スペース	20.000 m ²	←	26.500 m ²	+33%
出展者数	366	363	452	+25%
報道関連者数	483	481	482	0
業界関係入場者数	4.427	5.211	5.387	+3%
一般来場者数	10.244	10.948	12.468	+14%
トータル来場者数	14.671	16.159	17.855	+10%

（但し、トータル来場者数には報道関連者数と出展者バッチを持つ2,426名の出展者関連の入場者は含まれていない。また、上記の数量は第三者機関による厳正な数字であり、これがドイツのショーの公表数字の権威を保っている）

注目したいのは、大手のオーディオメーカーの健闘と昨年まで出展を見合わせていたメーカーが多く再出展していたことである。しばらくこのショーから遠ざかっていたスコットランドのLinnも今年はブースを構え、新製品を熱心にデモしていた。また音楽ソフト会社の出展が増えてきたこともダウンロード・ミュージックの人気上昇に合わせた動きなのであろう。昨年と一昨年SONYが戻ってきて大きな期待を集めていたが、今年は何故か出展を見合わせたとのことで、根強いソニーファンの失望の声が会場でも囁かれていた。いろいろな事情があるにせよ、ソニーにはハイレゾのリーダーとしてこのような重要なショーでは是非頑張ってもらいたいものである。

今年の大きな動向は、ハイレゾ・ダウンロード音源が完全に市民権を得たことや、ハイエンド業界にもヘッドホンの急速な浸透が見られたことである。当然のことながら高音質ポータブルプレーヤーや高級ヘッドホンアンプなど、モバイルの世界に高音質を求めるユーザーが増えていることがショーのあちこちで直接体感することができた。昨年あたりから顕著となったヘッドホン、イヤホンなどの展示やデモが今年はさらに出展者が増えどこのブースでも人だかりが絶えなかったことも今年の大きな現象であろう。日本でもヘッドホン祭りやポータブルオーディオの展示会に人気が集まっているが、このハイエンド・オーディオショーで世界の最高のオーディオ機器に並んでこれだけの展示数や人気が集まるのを見ると、確実に新しいオーディオのライフスタイルが出来上がってきていることが実感できた。

今年も多く真空管アンプが出展し「未だ真空管アンプ健在なり」を誇示していた。そして、依然アナログレコードの人气が衰えていない。否、今年は明らかにアナログディスクの人气が高まっていることを裏付けるような数々のレコードプレーヤーの新製品展示やデモが行われていた。最近国内でも「アナログレコードのリリースがまた活発になっている」との記事が出ていたが、まさにこれは世界的な流れであろう。事実、この会場の幾つかのブースでは演奏家達が自己の新譜アナログレコードをデモしながら講演を行っていた。本誌1月号の「CESレポート」でも報告した米国のジャズ歌手Lyn・Stanleyも、このハイエンドショーに顔を出し、オーストリアのアナログプレーヤー・メーカーPROJECTのブースで自分のリリースしたレコードにサインのサービスを行っていたのも印象的であった。さらに今年は2社から2トラ38のミュージックテープが発表されていた。ハイエンドの世界ではアナログの人气が年々高まっていることがあっても衰えることはないようである。



(写真1) ハイエンドショーの会場となったM.O.Cと今年のポスター

それでは、今年もいくつかのブースを写真でご紹介しよう。

会場内にはこのような広々とした集いの場所が数多く設けられ、ここではスナックのサービスや仲間とのオーディオ談義に花が咲く。毎年ショーのコンセプトや視覚的なイメージを統一し、これがこのショーをブレないものとしている。まさに「継続は力なり」である。



(写真 2) 明るく広々としたショー会場内のスペース

今年も会場のいたるところでライブ演奏が行われ来場者を楽しませていた。

(写真 3、4、5、6) 会場内でのライブ演奏



(写真 7、8) ドイツのハイエンド・オーディオショップ High Fidelity Studio のブース
メインプログラムソースはもちろんアナログレコードだ。



このブースには Jim Fosgate の真空管式ヘッドアンプ Fosgate Signature も展示され注目を浴びていた。ここでもヘッドホンの世界の広がりを感じられた。

久々にこのハイエンドショーに復帰した Linn。創立 40 周年記念モデルとして発表したデジタル伝送ミュージックシステム EXAKT は、フロントエンドがミュージックソースを高精度のデジタル信号に変換する EXAKT DSM とスピーカー内に設けられた EXAKT ENGINE で帯域分割やデジタルプロセッシングを行い、内蔵アンプでスピーカーを駆動するもの。Thomas Saheicha 氏の説明にも熱が入る。

(写真 9) Linn の新製品 EXAKT システムの発表とサウンドデモ



(写真 10) ハッピー姿でサウンドデモをする TRIODE の山崎社長



日本からも多くのハイエンド・オーディオ会社が出展している。むしろ国内より海外での評価が高いメーカーが目立つ。TRIODE の山崎社長もハッピー姿で人気を集めていた。

(写真 11) ノルウェーの
Electrocompaniet のブース

今年はアナログレコードプレーヤーを加えてのサウンドデモ。ここでもアナログレコードへの回帰が見られた。音にはうるさい営業の Volker Hunger 氏が久々に登場し説明に立っていた。



(写真 12) Dr. Feickert Analog のブース

アナログレコードプレーヤーの権威 Chris Feickert 博士が率いる Feickert Analog。今やドイツのみならず世界で評価が高まっている。



(写真 13) オーストリアのターンテーブル・メーカー Pro-Ject と同社 CEO Heinz Lichtenegger 氏

中級から高級機種まで多くの機種を揃えている Pro-Ject。世界に多くのファンを持つ。



(写真 14、15) ナガオカの交換針をはじめ、オーディオアクセサリを扱うドイツの Tonar のブースと同社取締役 Glenn Libgott 氏



新製品で今最も人気があるのが LP レコード保存用の中袋だそうだ。



(写真 16) レコードクリーニングマシン
Nessi Vinylmaster

アナログレコード回帰のブームに乗り多くの会社からレコードクリーニングマシンが発売されている。今回も多くの製品が展示されていたが、これはドイツ・ハンブルグの家内工業 DRAABE 社の製品。



(写真 17、18) 今年も人気の LP 販売コーナー



最新のオーディオレーベルもさることながら、昔の名盤が手に入るのも嬉しい。ここでは、日本製のレコードも人気が高い。



**(写真 19) TRANSROTOR 社ブースで
MC カートリッジの巻線実演**

1000 万円以上の超弩級ターンテーブル・メーカー、ドイツの TRANSROTOR 社。今年はカートリッジの OEM を受けているイギリスの Goldring 社のエンジニアを招き、MC カートリッジの巻線実演を行っていた。



**(写真 20) 演奏家による ELAC
のサウンドデモ**

今年は演奏家自らが自身のレコードを解説・再生しているブースが目立った。ここではヨーロッパで著名なピアニスト Martin Vatter 氏が新譜のレコードを演奏していた。



(写真 21) Corum Audio のスピーカー
まるでオブジェのようなスピーカーだが、そこにはスピーカーの理想を追求した結果という。能率は 105dB と高く小型アンプでも朗々と鳴る。



**(写真 22) DDD-MANUFACTUR の
Robert Kelly 氏**

日本語が流暢で、日本のオーディオ界にもその名を知られる Robert Kelly 氏。GERMAN PHYSIKS のカラフルなスピーカーの前でポーズ。



(写真 23) JoSound の
エコ・スピーカー

このイギリスの JoSound の社長 Joe Jouhal 氏は自然環境を大切にしたいと思いから、木材を使うことを避け、天然素材の中で最も早く育つ竹に注目し、この竹を用いてスピーカーを作っている。カタログや説明書なども紙を使うことを嫌い、すべてネット上で配布するという。そのポリシーのように JoSound の音は滑らかで心地よい。



(写真 24) 面白スピーカー

こんなスピーカーがあっても面白いと言われればそれまでだが……。しかしほんとにこれがハイエンドなのかは疑問が残る。



(写真 25) 伝統の TANNOY スピーカー

王者の風格を持つ英国 TANNOY のスピーカーラインナップ。良くも悪くもオーソドックス。



(写真 26、27、28、29) ヘッドホン、イヤホンのブースが目立つ

昨年より急速にヘッドホンやイヤホンのブースが確実に増えてきている。韓国や台湾などのメーカーの追い上げも顕著であった。ハイエンドの世界にもヘッドホンやイヤホンが浸透することで、新しいライフスタイルが生まれるのだろう。



(写真 30) Astell&Kern のブランドで急成長した韓国の iriver Astell&Kern
今年のショーでは新製品の据え置き型モデルを発表した。



(写真 31、32、33) アナログ回帰へのもう一つの 2トラ 38 のテープ

今年の大きな出来事の一つが 2トラ 38 のテープの発売を行う 2 社がブースを設けたことだ。一つはドイツの Lutz から発売されたテープで会場では STUDER のデッキでサウンドデモがされ注目を集めていた。さらにイタリアの HEMIOLA RECORDS からミュージックテープが売られ、それぞれ市販価格は日本円で 3 万円～4 万円ということである。2トラ 38 ファンには嬉しいニュースであろう。



(写真 34) オーディオ雑誌コーナーで見つけた
アナログレコードの書籍

オーディオ雑誌と並んで分厚いアナログレコード
の書籍を発見、名盤の解説や美しいジャケット写真な
どアナログファンにはお薦めの一冊だ。



今年もミュンヘンのハイエンドショーには多くの熱心なオーディオファンが集まり、その熱気
は連日絶えることがなかった。これを癒やすのはやはりドイツビール。会場内で、また街のビア
ホールで乾杯もまた連日絶えることがなかった。

この熱い風が日本にも届くことを祈って！乾杯 Zum Wohl！

